研究ノート

父と子の一体性から考えるエデンの園の物語の解釈

岡島　直方

南九州大学　環境園芸学部

An Interpretation of the Story of the Garden of Eden Based on the Unity of Father and Son

Naokata Okajima*

Faculty of Environmental Horticulture,
Minami Kyushu University

The leading scholars of Japanese landscape architecture have consistently addressed the Garden of Eden at the outset when compiling their writings on the history and philosophy of landscape design. This stems from their belief that the Garden of Eden represents the paradise humanity first experienced. However, they have not organically connected the Old Testament and New Testament in their discussions. According to Christian doctrine, the Old Testament should be read from the perspective of the New Testament rather than as an independent text. Interpreting the Garden of Eden in the Old Testament from this New Testament standpoint suggests the possibility of a different interpretation than the conventional one. As Christian doctrine, the Trinity was established in the Nicene-Constantinopolitan Creed. This thesis focuses on that concept to interpret the story of the Garden of Eden. Specifically, it will extract and discuss the idea, formalized through the doctrine of the Trinity, that the Father and the Son are one and the same. In doing so, it is thought possible to understand how the creed was formed by examining the discourses of the Greek Church Fathers prior to its establishment and the various debates preceding the solidification of the doctrine. The Fathers' discussions can be broadly summarized into three points. Viewing the Garden of Eden through the lens of the Father and Son being one reveals that the environment of the Garden itself is the Son, created by the God who would later appear in the world as Jesus Christ. It becomes clear that, among the Tree of the Knowledge of Good and Evil and the Tree of Life in the Garden, the Tree of Life symbolizes the role fulfilled by Jesus Christ. I believe this points to an aspect that the leading scholars of Japanese landscape architecture had not previously noted.

Keywords: Christian doctrine, Garden of Eden, Japanese landscape architecture, New Testament and Old Testament

はじめに

聖書の創世記の中に，エデンの園についての記述がある．それは理想的な園であり，人類の最初の人が生活したとされる場所である．造園学の碩学は，現実的な庭の歴史や庭の概念に関する書物をまとめる際に，話題として言及してきた．これについて触れてから具体的な造園の歴史について言及していくという記述方法が採用されている．しかし，彼らの参照の仕方は，旧約聖書のエデンの園を紹介したり，聖書がかかれた頃の社会での考え方などについて述べたりしたものの，新約聖書を含めた聖書全体として，つまりイエス・キリストの誕生と活動までを踏まえた言及はしていない[1,2,3]．新約聖書を通じて旧約聖書を読むという，キリスト教としての考えには立っていない．もしこのような考え方に立てば，旧約聖書全体に対する解釈が変わり，むろんエデンの園の記述の読み方も変わってくるはずである．造園学の碩学は，エデンの園の出来事を引き起こしている主体である神とはいったいどのような存在であるのかということについて言及していない．両書のうち旧約聖書だけを重視するユダヤ教に近い立場で読んでいたことになるのかもしれない．

キリスト教の教義において重要視されている有名な概念に，三位一体という考え方がある．三位一体とは，「父なる神，子なるキリスト，聖霊の三位格が一なることを言い，この三位はそれぞれ異なった神ではなく，

*連絡著者：E-mail: okajima@nankyudai.ac.jp

一なる神である」[4]という考え方である．これはニケア・コンスタンチノープル信条として381年に確定され，今日まで一般的にカトリック，プロテスタントの双方で支持されている考え方である．この確定によりキリスト教が「神」をどう捉えるか，正統的な考えと異端の考えとを分けることができるようになった．この三位一体という考え方を旧約聖書の創世記を読むときに適応するなら，エデンの園の物語の捉え方に何らかの変化が必要となるであろう．造園学の碩学によれば，エデンの園は理想の園，楽園である．たしかにそれは，見てよく，食べて美味しい実のなる木が植わっていたことや，豊かな水の流れがあったことなどの聖書の記述から連想される．

造園学は天地創造にも，エデンの園にも関係する分野であると思われる．一般的に造園とは，人間の立場で自然を活用し，楽園を創造する．聖書の天地創造は，神が自然をどのように成立させてきたのかということを示す**(図1)**．聖書のエデンの園の物語は，人類の始祖ともよべるアダムがエデンの園で任されていた仕事があり，それは園を耕し，守ることであったとする．人間世界の仕事としては，グリーンキーパーもしくは庭師といった職業が近いものにあたり、それは造園の仕事であると言える。そこで造園学のほうでも聖書や既往文献を参照してエデンの園についての解読をすすめることで認識をより豊かにもつことができるのではないかと考える．

図１　万物の創造主である神
（細密画　パリ国立博物館　14世紀）
（中央に神が老人として描かれ，周囲に動植物が描かれている．赤い円の外側は青色で描かれ，海，空，または宇宙を示しているものであろう）

エデンの園の物語は，単に人類が最初に体験した庭について描いているだけでなく，宗教的･倫理的な命題について読者に考えさせるプログラムが入っている．また，岡崎[1]が指摘するように，人類史としては大切な命題提起がある．

聖書は庭師，造園家，ランドスケープアーキテクトを含むすべての職業において，なぜ人は今の世の中において現在のような生き方で生きていかなければならないようになっているのか，という大きな枠組みについても取り扱っている．

特にエデンの園の中央に置かれた善悪の木と生命の木が，そのような問いへの応答につながりそうである．

本論は，新約聖書を通じて旧約聖書を読むときのキリスト教での考え方をまとめるにあたり，三位一体論が確立するまえの，キリスト教関係者達の言説に注目する．教義が確立する前には，さまざまな考え方が表出され，三位一体という考え方が何故必要となったか，どれほどの重みをもっていたかといった背景が分かるのではないかと考えられる．ただし本論においては，三位一体論における，父と子の議論を見ていく．エデンの園の出来事を引き起こした主体の神が何であるのかについて知りえるだろう．そのことは，旧約聖書のみで創世記を見ていくのとは異なる視点となろう．

調査方法

神とはどのような存在であるのかを時代の流れとともに概観するために，イエス･キリストの活動が終わった紀元１世紀頃から，ニケア･コンスタンティノープル信条が出される381年の間までの説教者たちの言説をみていく．コンスタンティノープル公会議では，三位一体の定式が整理･確定されたとされており，教義が定説化された重要な節目である．資料としては，「中世思想原典集成１」[5]を用いてそれまでの説教の流れを把握する．集成には，16名の説教師たちの考えが示されている．その中には，本論で検討の対象としている三位一体の中の，特に父と子についての記述があるであろう．聖書でも同様の記述を探る．聖書は日本聖書協会が発行している共同訳聖書を用いる．これにより，新約聖書と旧約聖書をつなぐ考え方を実際に確認する．

結　果

1）聖書自身の中に示されている父と子の関係

父と子の関係については，聖書の中にも示されている．ここでは福音書の中からイエス自身が語った言葉としていくつかのものを示す．

- 「人々の前で自分（イエス）をわたしの仲間であると言い表す者はわたしも天の父の前で，その人をわたしの仲間であると言い表す.」マタイ10:32
- 「天地の主である父よ，あなたをほめたたえます…すべてのことは，父からわたしに任せられています．父のほかに子を知るものはなく，子と子が示そうと思う者のほかには，父のことを知るものはいません.」マタイ11:25-27，（ルカ10:21-22に同様の記述）
- 「わたしが父にお願いできないとでも思うのか.」マタイ26:53

- 「わが神，わが神，なぜわたしをお見捨てになったのですか.」マタイ27:46
- 「あなたたちは，人の子が全能の神の右に座り，天の雲に囲まれて来るのを見る.」マルコ14:62
- 「父よ，わたしの霊を御手にゆだねます.」ルカ23:46
- 「神はその独り子をお与えになったほどに，世を愛された．独り子を信じる者が一人も滅びないで，永遠の命を得るためである．…」ヨハネ3:16
- 「御父は御子(イエス)を愛して，その手にすべてをゆだねられた.」ヨハネ3:35
- 「子は父のなさることを見なければ，自分からは何もできない．父がなさることはなんでも，子もそのとおりにする．…すなわち，父が死者を復活させて命をお与えになるように，子も与えたいと思う者に命を与える.」ヨハネ5:20-21
- 「父がわたしに成し遂げるようにお与えになった技，つまり，わたしが行っている業そのものが，父がわたしをお遣わしになったことを証している.」ヨハネ5:36

イエス･キリストは，旧約聖書の時代のあとに世に現れた存在である．そのため，当時の人々に自分がいかなる存在であるかを示すうえで，旧約聖書の時代に人々の間で語り継がれていた神のことを自分の＜父＞であるという言い方で説明し，新約聖書の時代になって表れた自分自身(イエス)の存在のことを＜子＞としている．このように説明することで当時の人々に，自分は旧約聖書で示されていた神と深い関係を持ち，その神から遣わされたものであると自己のアイデンティティーを表明した．上の中で下線を付した部分は，福音書の中において父と子とが連動していることや，子は全てのことを父からゆだねられていることを示している．

2) ギリシア教父たちが示した父と子の議論

①ユスティノス(100頃―165)による議論

(155年～160年)

ユスティノスは150年頃キリスト教的哲学学校を開設した説教者である．「ユダヤ人トリファオンとの対話」は，トリフォンというユダヤ教徒に向けられたキリスト教からの最古の弁証文学である[6]．ユダヤ教とキリスト教の成立や文化と関係があるため，まずはそれらの簡単な歴史を**図２**で示す．

図２から確認できることを述べる．紀元90年にユダヤ教の正典「タナハ」が制定された．紀元150年ごろに「新約聖書」が成立し，紀元190年頃から，ユダヤ教の聖典「タナハ」を「旧約聖書」と題してキリスト教の経典として受け入れることが行われた．こうした活動によりキリスト教では，旧約聖書と新約聖書を一体化し，ともに学ぶ対象となった．新約聖書に旧約聖書を包摂したというべき流れである．

「タナハ」(旧約聖書)の冒頭には，神による七日間の天地創造の物語が描かれている．そのすぐ後にエデンの園の物語が続く．タナハ全体を通して，ユダヤ人は天地創造に関わった唯一神(呼称はエロヒームまたはヤーウエなど)の存在を受け入れている．

紀元前6-4年	イエスの誕生（ヘロデ王の治世から推定）
紀元29-30年	イエス宣教の終わり
紀元30年頃	イエス十字架刑
90年	ユダヤ教の正典（タナハ）制定　ヤムニア会議
100年頃	小さな共同体でキリスト教が生じる。
150年代	キリスト教の正典（新約聖書の中身）成立
190年頃～	キリスト教で、ユダヤ教の正典を「旧約聖書」として、受け入れる。
325年	ニカイヤの公会議で、父と子に関してアタナシウス派の説が認定される。
381年	コンスタンティノープル公会議で、父・子・聖霊からなる三位一体説が確定する。

図２　キリスト，キリスト教の経典，教義に関する概略史[5]（内側の四角内はイエスの活動期）

しかしユスティノスは，旧約聖書(タナハ)の中に描かれている３つの場面(アブラハム，ヤコブ，モーセの場面)などにおいて，「タナハ」における唯一神とは異なる神(おそらくイエス･キリストのこと)が描かれていることを示した．

ユスティノスは，ユダヤ人に，子なる神イエス･キリストの存在を説明するために＜万物の創造者**(図1)**のもとに，別の神，別の主がいること，つまり，世を創造した神とは異なるもうひとりの神がいること＞などを説明し，ユダヤ人の聖書の読み方に揺らぎを与える．＜もうひとりの神＞がイエスだということを明示はしてはいない．＜神＞＜主＞＜イエス･キリスト＞といった言葉を用いる．この書のユニークな点は，説明をユダヤ人相手におこなっているところである，ユダヤ人の経典であるタナハは，ユスティノスの視点によってキリスト教にとって合理的な説明へと読み替えられている．本人は読み替えであるとは記していない．対話の形式をとるゆえに，ユダヤ人だったらこのような読み替えに対してどのように反論し得るかを示している．

②オリゲネスによる議論

(185年～245年)

ニカイアの公会議[7](325)以前のキリスト教叙述家である．本箇所は「創世記講話」からの叙述である．

冒頭から，「万物の元(はじめ)とは，われらの主，…であるイエス･キリストでなければ，いったい何であろう.」と述べられている．

旧約聖書の天地創造の記述には，天と地，光と闇，大空による水と水の分離，朝と夕，乾いたところと水の集まったところ，草と果樹の芽生え，大空に光る物，星，生き物，地上の獣，人の創造などの場面がとりあげられている．これらの記述は通常読む際には字義的な解釈で読むことが多いと思われる．しかしオリゲネ

スは外側の形に現れるものとしてではなく，目に見えない存在に関する記述として読み取っている．その点について幾つか事例を挙げる．例えば，一日目，神が天と地を造った最初の段階では，天と地は，救い主の内面に造られたものだとする．「闇が深淵の上にあり，神の霊が水の上を動いていた」の箇所では，ここでの闇とは「悪魔とその使いたち」のこととする．神は「光あれ」と述べて，光と闇を分け，光を昼とよび闇を夜とよばれた．このとき以来，時間というものが生まれたとする．二日目に「大空あれ，水と水の間を分けよ」というが，ここには教訓があり，我々自身もこのように上と下の水を分けるものとなるようにすべきだという．下にある水には「この世の支配者」などが住んでいるが，そこから離れて大空の上にある霊的な水に参与しなければならないなどとする．天にある上のものを求めるべしとのことである．「天の下にある水は一つ所に集められ，乾いたところが現れよ」については，天の下にある水とは，われわれの体の罪と悪習が切り捨てられない状態だとし，その状態では＜乾いたところ＞は現れないとし，＜乾いたところ＞は天の上に向かって進むうえでのよりどころとなる場所だというように考えている．その場所にあって，ようやく実をむすぶことができる，としている．

＜大空＞の上にある光るものとは，イエス･キリストのことであるという．

天地創造の七日間の内の六日目に誕生した人間については，聖書では「(神は)人間を造られ，人間を神の像にかたどって造られた」と書いてあるが，この箇所での人間とは，物体としての人間ではない．ここで造られたのは，目に見えなくて，非物体的で，朽ちないで，不死のものであり，それは人間の＜内なる人＞である．なぜなら，神の像にかたどって造られたものがもし形あるものだったら，神に物体的な形があるものだということになるが，それは神に対して不敬きわまりない考え方だからであるとする．

一方で＜神の像＞にかたどった人間とはイエス･キリストであり，そのイエス･キリストにかたどって造られたのが，似姿としての人間である．オリゲネスは父なる神と子なるイエスという概念を直接的には説明していない．人間が，獣，鳥，這うもの，四つ足のもの，他のすべてのものを支配するよう＜神＞は望んでいるとする．人間が特別の存在であると強調する．

オリゲネスは，＜父＞と＜子＞という言葉は使わなかったが，キリストの存在の重要性を強く説いている．

③アレイオスによる議論

(318年～334年)

父と子の関係性において，異質の考え方を提示した説教者である．これまでなされていた議論においては，子なる神イエスは，父なる神と限りなく同じであるか，または同じである，というように考え，子なる神は元(はじめ)初めから存在していたと主張しはじめていた．しかし彼は，父と子には違いがあることを示した．例えば，「＜子＞は元をもつが，神は元なしの者である．」子なる神は，まぎれもなく神の被造物であるが，他の被造物とは異なるもの(被造物)である．ただそうすると，他の自然とイエスキリストが近い存在であると述べることになりかねない．アレイオスは，唯一の神がおり，この神が，＜独り子なる子＞を生み，この＜独り子＞を通じて代々と万物を造られたこととしている．＜神＞は＜子＞に先立って存在していたとする．＜父＞がすべてのものの泉であり，＜子＞は時間に関係なしに(時間が始まる前にということか)万物に先立って父から生まれた者である．この考え方は，新約聖書の福音書の中でイエスが弟子に語ったことに近いように見えるが，のちの公会議で異端とされる．

④アレクサンドロスによる議論

(319年)

アレイオスの父と子に対する議論の問題点を強く指摘した．緊迫感あふれる議論をし，ニカイア公会議の開催に影響を与えたと思われる．アレイオスを初めとする数名は，神が父ではなかった時があった，つまり，神の＜言(ロゴス)＞(イエス)が常に存在したのではない，存在しないものから作られた＜子＞(イエス)は被造物であり，造形物である，＜子＞はすべての理性的＜被造物＞と同様に，本性的に変化，変易するものである，などという説に対してヨハネの福音書「独り子なる＜子＞，この方を通して万物は成った」(ヨハネ1:18,1:3)を引用し，こうした考え方は聖書の記述に反しているとした．

⑤エウセビオスによる議論

(325年)

オリゲネスに深く傾倒していたカイサレイア司教である．父と子の関係についてのニュアンスにこだわった．ニカイア公会議のまとめ役であったコンスタンティヌス帝の許で造られた信条の草案を検査し，このときまでにまとまりつつあった，父と子は「同一本質(ホモウーシス)の者」であるという考え方を知り，＜父＞と＜子＞とは本質的に同一である(ホモウーシス)であるという司教方の考えが解釈に間違いがないかどうか確認し，さらに＜子＞が造られたもの(一般的な被造物)とは異なることを尊重しているかについて確認した．その上で，ニカイア信条に大筋賛成することを示した．

⑥アタナシオスによる議論

(335年～337年)

アタナシオスは新約聖書のヨハネ(使徒)の福音書の冒頭の記述から大きな示唆を得ている．新約聖書と重なる部分を旧約聖書の天地創造の物語の中に読み取る．彼は，ヨハネ福音書の「初めに言(ことば)があった．言は神と共にあった．言は神であった．この言は，初めに神と共にあった．万物は言によって成った．」などの箇所を旧約聖書にあてはめる．この＜言＞がイエス･キリストのことであることを示していく．

神は自分の似姿であり自分の像としての人類をつくった．それを神の＜言＞の力にあずかるものとされた．

人類は本来なら＜言＞の影であり，＜言＞にあずかった者となり，その点で聖なる者たちの生をおくりうる．楽園において生きる者として，人類は至福のうちに留

まることができるように設定されたはずだ．しかし，神は人間の決断能力が両極に揺れ動くのを知っていたので，（エデンの園において）神は法と場によって人間を固めた．人間が恵みを保守し，善い者であり続けるなら，苦しみも悲しみも煩いもない生命を持ち続けることができ，天における不死が約束されていた．しかし，違法をなし，変節して卑劣な者となると，死に至る腐敗を甘受してしまい，楽園のうちに留まることはできなくなり，楽園の外で死ぬべき者として死と腐敗のなかに留まることになる．善悪の知識の木からとって食べれば「死んで滅びるであろう」と聖書にかいてあるのは，単に死ぬだけでなく死の腐敗のうちに留まることであるとする．これを語るのは，救い主がのちに人間の世界に現れたことを語るにどうしても必要だからであるとする．「（イエス・キリストは）本性によって肉体をもたない者であり＜言＞（ロゴス）であったが，ご自分の父の，人々への愛と善に応じて，我々の救いのために人間の肉体をとってわれわれに現れた．（言の受肉化）」「父は＜言＞（イエス）を通じて「被造物」を造ったのと同様に，父はのちに＜言＞を通じて被造物の救いを行った」とする．神は創造主である．それは物質が先に存在しなければ何事もなしえないような存在ではなく，＜言＞を通じて神は万物を創造された．目に見えるものは，目に見えるものから造りあげられたのではないことに留意せよと述べる．

我々が違反をしたことは，＜言＞の人々に対する愛を呼び起こし，その結果，主がわれわれの内に来られ，人々のあいだにあらわれたとする．人間はかつて存在しない者であったという本性を持っている．＜言＞の臨在と人々への愛によって，存在するように呼び出されたものだ．神に対する認識を欠けば存在しない者へともどってしまう．ならば人間は本性に即して死ぬべきものとなる．存在する方を観照することで，存在する方との類似性をまもるならば，本性に即する腐敗を鈍くし，人類は不滅であり続けることもできたはずである．不滅であったら神として生存したはずである．しかし，悪魔（へび）の唆しによって腐敗する者へとなった．以降，不義に迷い込み，あらゆる違反を犯しつくし，一つの悪にとどまらず，あらゆる悪を考え出し，罪に対して飽くことを知らぬ者となってしまった．最初の神の像にかたどって成った人間は滅びてしまった．成った者がなおざりにされ，滅ぼされるのであれば，最初から神は人間を造るべきではなかったのではないか．造っておきながら，自分の業で（人間が）滅びるのを見過ごしにするのなら，そこに無頓着があることになり，それは，神の善性よりも無力のほうをさらけだすことになる．人々が腐敗に引きずられるままにしておくことは，神の善性にふさわしくなかった．ここで働きをなすことができるのは，初めに存在しないものから万物を造った＜言＞のほかに何があろうか．＜言＞は父のものであり，万物の上にあるから，この方だけが万物を更新する使者となりえたのだ．そこで非物質的なものであった神の＜言＞は我々の地に来た．造られたものがほろびることなく，人々の内になされた父の業が無駄にならないように，肉体を，それもわれわれの肉体と少しも変わらぬ肉体をご自分のものとしてまとわれて来た．すべての人が死の腐敗に対して責任があったので，＜言＞はわれわれと同じ肉体をとり，すべての人に代わってその肉体を死に渡し，父に捧げた．この方の内にあってすべての人が死ぬことで，人々を腐敗に定める法が破棄されることになり．人々の死に対する負債が返済された．さらに＜言＞はよみがえることにより，人々の復活への希望を与えてくださったともいう．

＜言＞は，神の世界，人間の世界，人間の死後の世界とあらゆるところに自分をいき渡らせている．アタナシオスは，キリストの愛の広さ，長さ，高さ，深さがどれほど行き渡っているかを理解すべし（エフェソ3:17-19），という聖書の箇所も指摘している．イエスは形成者であり，創造者である．イエスの死と復活は，多くの人々の悪からくる死と腐敗の撤廃とその後における再生というものを象徴する．死という障害がなくなったことを示すにおいては，死からの復活という事象がなければ，死がいつ終わったのかが分からない．キリストの死と再生をみて，人々は死が存在しないもののように考えることができるようになった．それで死をもとに人に影響を与えていた悪魔の存在が死ぬ，とした．

まとめ

対象16名のうち，10名の言説は父と子に関する記述がないか，時期が該当しなかったため取り上げなかった[8,9]．上記の通り，6名の言説をみてきたが，大きく3つの種類の議論が確認された．1つめは，父なる神と子なる神はともに万能の神であり，一体のものであるとする議論である（父＝子）．アレクサンドロス，エウセビオス，アタナシオスらの議論が該当する．2つめは，父なる万能の神に対して，子はその万能の神のおかげで生み出された神である．二者には違いがあり，父なる神こそ諸元の神である（父＞子）というものである．アレイオスの議論が該当する．3つめは，父と子という概念に対して明確な表現で述べていないものである．初期のユスティノスの議論では，父なる神とは別の神がいること（父≠子）を議論する．新約聖書という，新しくできた書物の主人公であるイエスの正当性を、旧約聖書を信じるユダヤ人に説明するために，ユダヤ人が唯一神として見ていた神以外の神があると説得を行った．オリゲネスの議論はイエス・キリストを重視するが，父と子という観点に関して明確に述べてはいない．

アタナシオスはアレイオスの言説に激しく反論していた．両者の主張は相いれなかった．アレイオスらの主張は，どちらかというとユダヤ教寄りであり，少し短絡的にみれば，父が最高神であり，子は存在しないはずか，またはそれに従属しているものという具合に優劣をつける考え方にみえる．

聖書の記述では，父なる神があって，あとから子なるイエスが人として現れたという時系列で描かれているのに，本論で確認した説教者たちは，イエスが最初からいたのだということを強く説明する傾向があった．

上のように父と子についての捉え方にまだ揺れがみられた中で，コンスタンティノープル公会議が開かれ，

アレイオスの影響も少し見られるものの，父は子と一体であるということが明文化された[10]．当時異論はあったが，キリスト教としての教義が確定された．宗教が政治の力を借りて信条を統一したということであり，タナハ，旧約聖書の読み方に変革を与えることを公認する行為であった．万物の作り手の話は，創世記の天地創造の箇所に関わる読み方である．教父たちはそこにすでに子なる神（のちのイエス）の働きがあるとした．それならば，それにつづくエデンの園の物語においても，この考え方は適用されるべきである．エデンの園の中心に2本の木を生え出させて，そのうちの1つを食べることを禁止した神は，イエス･キリストと一体であったことになる．これらの教父たちにとって，この神はのちのイエス･キリストそのものであったということになる．ただアタナシウスの言うように，まだ人という形を取っていない状態のイエスである．禁じられていた実をアダムが食べていたこともそのイエスは感知していたであろう．こうした視点は，造園学の碩学の指摘にはなかった点である．また旧約聖書におけるその後の物語においての，数々の人間の営為もみており，救済のために人としての姿でこの世に登場（受肉化）するポテンシャルは高まる一方であったであろう．人は善悪の木からとって食べて，神の言葉に逆らったため，エデンの園から出て行かざるを得なくなり，お産の苦しみや苦しんで働き続けるという道に歩み出てしまった．一方命の木の方は，取って食べると永遠に生きる者となることが聖書に記されている．善悪の木からとって食べた人間の状態で永遠に生きる者となることは，神の本望でないからこそ，エデンの園の入口を二度と入ってこれないようにガードしたのであった．神にとって，死が入り込まない状態で永遠に至福の状態で生きることが人間への願いであったが，エデンの園から出て行ってしまった人間に対しては，その施しようがない．そのため，のちにイエス･キリストとして世に出てくる神は，園の外に出て行ってしまった人としての身体をもって世に現れ，世において人間の生き方を正していく道を示すことになる．善悪の木からとって食べたことの禍をキャンセルし，人をいったん真っ白な状態にできるならば，善悪の木から食べなかった状態と近くなる．その状態で永遠の命を得ることが出来るようにすれば，初期のエデンの園にいた人間の状態に近づくのである．永遠の命を得るということは，エデンの園においては，命の木からとって食べることを意味する．それは，新約聖書でイエス･キリストが，私の体としてのパンと私の血としてのぶどう液を飲みなさい，と言ったことと似ている[11]．イエスはあたかも自らが命の木そのものになったかのようである．善悪の木が旧約聖書の主題と関わり，違反が入り込んだ人の歴史を描くことにつながり，命の木は，新約聖書の主題となるイエス･キリストについて知識を深めることにつながっている．体を食べ，血を飲むということは，イエスの身体を味わい尽くすということであり，キリスト教においては聖餐式として重要視されている．イエス･キリストは，自らを，エデンの園にあった命の木を連想させる存在として示している．イエス･キリストはエデンの園の環境を作り出した存在であるからこそ，違反を犯すまえのエデンの園の環境と同等の場所に人間がおもむくことができるようにする方法を知っており，それを実践したということがいえるのではないだろうか．

謝　辞

本論は，2025年5月に造園学会創立100周年記念大会において口頭発表された内容をもとに再構成したものである．別府不老町教会の尾崎二郎牧師には資料に関する示唆を得た．謝意を表する次第である．

摘　要

日本の造園学の碩学はエデンの園について触れる際に，旧約聖書の記述を中心に論じている．しかし，キリスト教の考え方としてエデンの園を読み解くには，新約聖書の考え方と合わせてみる必要がある．さらにキリスト教の教義としては，公会議によって定められたニケア･コンスタンティノープル信条というものがある．この信条で三位一体論が確立された．本論は特に三位一体論を通じて定式化された，父と子は同一であるという考え方に注目する．本論は，この信条がどのように出来ているのかの背景を知るために，信条が確定する前にギリシア教父たちがどのように父と子について論じていたかを調べた．教父たちの議論は大きく3つにまとめられたが，こうした論争に解答を与えたものが信条であった．

当時の教父たちの父と子が一体であるという考え方に基づいてエデンの園をみると，天地創造と同様に，エデンの園の環境は，子でありのちにイエス･キリストとしてこの世に現れる神が創り出したものであることになる．エデンの園の善悪の木と命の木のうち，命の木は，イエス･キリストが果たすことになる役割を象徴するものであることが分かった．

引用文献･補注

1） 岡崎文彬（1981）造園の歴史Ⅰ. P.33, 同朋舎，京都
岡崎はエデンの園の語源について検討し，エデンの園はギリシア語でパラデイソスというギリシア語に訳されるとしている．岡崎はエデンの園がもし存在したとしたらパレスティナの東にあったのではないかという．だとすれば，水と緑に欠乏した場所において，エデンの園の情景は楽園であったに違いないとしている．これらの場所の推測を除けば，岡崎は，「その場所はおろか，存在さえ確定されていないエデンの園については造園史上とかく議論する必要がない」と述べている．末尾で「いずれにしてもエデンの園は人間性を追求する上では重要な資料であるが，造園史からの究明は現時点ではなお無理と思われる．」と述べる．

2） 針ヶ谷鐘吉（1977）西洋造園変遷史. pp.11-15, 誠文堂

新光社，東京
針ヶ谷は，旧約聖書の中に出てくる物語や伝説は，考古学，民族学の資料として重要であり，文学的な面からも評価できるとして，西洋造園の通史の序章にエデンの園について記している．エデンの園についての記述が，旧約聖書の創世記以外の書物にも描かれていることを指摘している．たとえば，エゼキエル書28章，イザヤ書51章である．新約聖書の中にはエデンの園は全く出てこないがパラダイスという言葉が出てくるとし，ルカ23:43，コリント12:4，黙示録2:7などをあげる．針ヶ谷が参照したのは，文語訳聖書であり，現代の標準となっている新共同訳などのものとは異なる．針ヶ谷はエデンの園にあったとする善悪の木と智恵の木が何であるのかという問いを立てている．多くの画家によって智恵の木はリンゴとして描かれていることを紹介している．大槻氏がこれをアンズとしているとしている．また，命の木はナツメヤシもしくはイチジクではないかとしている．画家がエデンの園をどのように描いたかに触れて，最後に，「聖書は信仰の書であることに重きをおき，…神が人類にあたえた豊かな地としての象徴的意味を考え，画家が自由に想像によって描いたように，空想にゆだねるのが妥当とおもわれる」と結んでいる．

3） 進士五十八（2005）日本の庭園. pp.3-5，中公新書，東京
進士は，庭園は英語でガーデンと言うが，これは防衛するという意味のganガンと喜び愉しみを示すedenエデンの合成された言葉であり，安全快適で人間にとっての理想世界であるという点で，日本庭園と同意同根であるとしている．

4） 秋山憲兄（2001）新共同訳聖書辞典．p.193，新教出版社，東京

5） 上智大学中世思想研究所（2018）中世思想原典集成 精選１　ギリシア教父・ビザンティン思想.平凡社，東京

6） ユダヤ人トリフォンにとっては，万物を創造した神ただひとりだけが神である．ユスティノスは，聖書の中の数カ所を引用しながらこの考え方に反論している．ユスティノスは，万物の創造者の許に別の神，別の主がいること，万物の創造者が人間に伝えたい事柄を告げ知らせる存在があることなどを主張している．たとえばマムレの樫の木のところで，アブラハムが三人の人に出会ったが，そのうちの一人は＜神＞であるとする．ユダヤ人にとっては三人とも神の御使い，天使と解釈している箇所である．ユスティノスは，世を創造した神とは異なるもう一人の神がいる，数字の上でもう一人となるのであって認識の問題ではない，という言い方で三位一体のうちの父と子の存在を指摘する．その存在（子）は世の造り主がしたいこと，関わりたいこと以外には何もしない存在であるとしている．この存在はソロモンの箴言8:22に記されており，「実際父から出，すべての被造物より先に生まれた方が彼とともにいた」という箇所を示した．天地創造の中で神が人を造るとき，神は「我々にかたどり，我々に似せて，人を造ろう」と言っている．この「造ろう」というとき，神が独り言のように自分に言い聞かせているのではなく，この言葉の受け手となる存在があったに違いないとする．それがもう一人の神である．そのようなことから，神には父なる存在に加えて，子なる存在＜イエス＞があるという主張を行っている．トリフォンはユスティノスの話を聞いて，納得できる点があるとしながらも，だとすると，そのような存在が人間の女（マリア）から生まれたということの矛盾はどう説明するのかと問う．それに対してユスティノスは，イザヤ書7：10-15の記述をもって，すでに旧約聖書の中にその存在が人間の処女から生まれることはかかれているとしている．出エジプトの最中においてもこの存在は現れていたとしており，「主はモーセに言われた．この民に言いなさい．見よ，わたしはあなたの前に使いを遣わして，あなたを道で守らせ，わたしの備えた場所に導かせる．彼に逆らってはならない．…彼はわたしの名を帯びているからである．」を引用して，この，「使い」というものがイエス・キリストである，としている．ユスティノスは父なる神とは異なる神の存在について書かれたものとして天地創造や出エジプト記，詩編，イザヤ書などをあげたが，これらは旧約聖書の範囲内の記述である．

7） ニカイア信条とのちのニケア・コンスタンティノープル信条との間の違いは何か．条文の内容を確認する限り，主旨においてほとんど違いはない．ともに父，子の性質，父と子の一体性，主なるイエスが人間の乙女より生まれて人となったこと，十字架に架けられ苦しみを受けたイエスが三日後に復活したこと，その後天に上り神の右についたこと，聖霊の存在，父と子との関係性（三位一体），洗礼と教会を信じること，死者の復活と来世の命を待ち望むことなどからなる．
これらの公会議で定式化されたものは，すべてのものの造り主である全能の父がいること，父と一体である神の独り子イエス・キリストという主がいて，すべては主によって造られたことである．

8） 190年－210年頃のクレメンスの言説については本文で取り上げなかった．ここでの彼の主張は，新約聖書のなかの福音書にみられるイエス・キリストの言葉，＜財産のある者が神の国に入ることはなんと難しいことか＞という言葉をいかに解釈したらよいかを問い，富のあるものが救われないとイエスが述べているわけではないことを説明している．富があることは，善をなすために必要な条件であるとする．新約聖書のさまざまな箇所を用いて考察しているが，本論のように旧約聖書の内容を，新約聖書の概念で読むという観点からは，大きく取り上げる箇所がないので省略する．ただし以下を重要な指摘として記す．主（イエス）が，福音の意図するところは永遠の生命を賜物として授けるところにあることを示すため＞というところで，主が永遠の命を与える存在であることに言

及している．また「神に関する無知は死であるのに対し，神に対する知識，親しさ，神への愛，そして神に似ることのみが生命である」との指摘も重要である．また地上に生きた人物に関わって，ヨハネの福音書1:17を解説している箇所では，「律法はモーセを通して与えられたが，恵みと真理はイエス・キリストを通して現れた」の箇所を引用し，キリストは旧約聖書で示される律法の完成者であること，仮に律法をすべて守ったとしても，永遠の命に至るには不十分であることを述べたとしている．

9） バシレイオスによる議論（370年頃）は，本文にとりあげることをしなかった．ここでは，モーセによる旧約聖書の天地創造の物語の書き方「始めに神は天地を創造した」が大変優れていることをのべている．古代ギリシアの学者のように万物の組成を特定の観点から分けて記述していくという方法には足りないものがあるとしている．それらからは確固としたゆるぎない議論は生まれなかったとする．今回対象としている三位一体の父と子の部分についての記述はみられなかった．

10） 上掲7）と同様．

11） 過越の晩餐の際にイエスは，弟子達と食事をした．その際にイエスはパンをとって賛美の祈りを唱えるとそれを裂いて，弟子達に与えると言われた．「取って食べなさい．これは私の体である．」杯を取り，感謝の祈りを唱え，ぶどう液を弟子達に与えると，「皆，この杯から飲みなさい．これは罪が許されるように，多くの人のために流されるわたしの血，契約の血である．」（マタイ26:26-28）と述べた．